

## さとうきびの植付・株出管理時におけるメイチュウ類防除対策について

県内全域において、メイチュウ類(イネヨトウおよびカンシャシクイハマキ)の発生が一部圃場で多い状況にあります。今後の被害拡大が懸念されますので、植付時又は株出し管理時の防除対策を徹底しましょう。

### 1 メイチュウ類被害の発生状況

- (1) 沖縄本島地域における3月中～下旬の調査の結果、夏植圃場での芯枯茎率は5.5%であった。
- (2) 宮古地域における3月中旬の調査の結果、新植・株出圃場での芯枯茎率は5.3%(前年1.8%)であった。
- (3) 八重山地域における3月中旬の調査の結果、新植春植圃場での芯枯茎率は2.6%(前年0.2%、平年2.4%)と平年並であった。

### 2 発生生態および被害

- (1) イネヨトウ(図1)
  - a 沖縄では年5～7世代を重ね、周年発生する。
  - b 卵は葉鞘の内側に卵塊で産み付けられ、1雌当たりの生涯産卵数は400～700卵に達する。
  - c ふ化幼虫は、葉鞘の内側を下降して節部の芽や根帯から食入し、生長点を加害し芯枯れを起こす(図2)。
  - d 初期被害は圃場周縁部で見られ、圃場内でスポット状や畝に沿って被害が拡大する。被害が集中的に起こるため、生育初期に加害されると坪枯れを起こすこともある。
  - e 被害圃場およびイネ科雑草等が発生源となり、新植圃場に侵入する。
- (2) カンシャシクイハマキ(図3)
  - a 沖縄では年6～7世代を重ね、周年発生する。
  - b 卵は葉や茎などに1～数卵ずつ産み付けられ、1雌当たりの生涯産卵数は200～500卵に達する。
  - c ふ化幼虫は、葉鞘の内側を下降して節部の芽や根帯から食入し、生長点を加害し芯枯れを起こす。
  - d 被害は圃場に散在的に発生する。

### 3 防除対策

- (1) 植付時
  - a 全茎苗は剥葉し、メイチュウ類の加害芽子のある苗は使用しない。
  - b 圃場内外のイネ科雑草は本種の発生源となるため、除去する。
  - c 植付時又は株出管理時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を施用する。
- (2) 生育初期
  - a 周辺圃場における本種の発生の有無を確認する。
  - b 芯枯茎が発生した場合は、茎を地際部より深く切り取り処分する。
  - c 食入初期の幼虫を対象にした薬剤防除を行う。
  - d 培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。
  - e 被害の多い地域では、薬剤による一斉防除を行う。

### 4 注意すべき事項

- (1) 粒剤を施用した後は土壌混和を行う(図4)。
- (2) 乳剤を散布する場合は、葉鞘内に薬液が浸透するように丁寧に散布する(図5)。
- (3) 虫体浸漬法によるスミチオン乳剤の感受性試験の結果、本虫の薬剤への感受性は地域によって差がある(表1)。
- (4) 伊是名島産個体では、虫体浸漬法に比べ摂食法による死亡率が高かったことから、葉鞘内へ十分に薬剤を浸透させることで、防除効果が高まると考えられる。
- (5) スミチオン乳剤は、若齢幼虫を防除対象とした剤であることから、1～2週をおいて複数回散布することで防除効果が高まる。
- (6) 天敵を温存するために、散布剤による薬剤防除は6月までに徹底して行う。
- (7) 薬剤散布の際は飛散(ドリフト)防止に努める。



図1 イネヨトウ幼虫



図2 イネヨトウによる芯枯れ



図3 カンシャシンクイハマキ幼虫



図4 粒剤は散布後土壌混和する



図5 葉鞘内へ十分に薬液を浸透させる

表1 イネヨトウのスミチオン乳剤感受性試験結果

地域	死亡率(%)	
	虫体浸漬法 <sup>※1</sup>	摂食法 <sup>※2</sup>
伊是名島	1.3	56.7
本島北部	41.1	-
本島中部	37.1	-
本島南部	78.3	-
宮古	12.5	-
八重山	1.8	-

農業研究センター調べ

※1 虫体浸漬法:スミチオン乳剤(×1,000倍)にイネヨトウ幼虫(4~6齢)を5秒間浸漬し、生死を3日後まで調べた。

※2 摂食法:さとうきびにスミチオン乳剤(×1,000倍)を散布し、イネヨトウ幼虫(4齢)に餌として与え、生死を7日後まで調べた。

★詳しくは沖縄県病害虫防除技術センターにお問い合わせ下さい★

TEL: (本所)098-886-3881、(宮古駐在)0980-73-2634、(八重山駐在)0908-82-4933  
ホームページアドレス : <http://www3.pref.okinawa.jp/site/view/cateview.jsp?cateid=119>